

大阪大学図書館報

Vol. 22 No. 4 Dec. 1988 (昭和63年) 通巻 94号

目

次

- 米国医学図書館視察報告(1)
 - 医学・生物学系外国雑誌センター館に相応しい生命科学情報センターを目指して-
- 日米大学図書館会議に参加して
- 利用者用オンライン目録検索(OPAC)の開始
- 研究室等の端末からの検索サービスの開始

- 目録システム講習会(地域講習会)の実施について(報告)
- 教官著作寄贈図書
- 会議
- 日程
- 人事

米国医学図書館視察報告(1)

—医学・生物学系外国雑誌センター館に相応しい生命科学情報センターを目指して—

鈴木 不二男

大阪大学附属図書館中之島分館運営委員会では21世紀に向けて斬新な国際的センスに溢れた「生命科学図書館」を新設するに当たり、米国の進んだ医学図書館の建築と機能をつぶさに視察してその考え方を幅広く採り入れたいと考え、1986年11月の第1次視察団に引き続き、第2次視察団を去る8月下旬に派遣した。今回は教官からは森本兼義教授、当時在米中であった武田裕助教授と私、中之島分館から福留武士課長と岩本速雄掛長、それに文部省文教施設部の高久晴課長補佐、本学施設部の清水修一郎課長の計七名が参加した。このうち森本教授と武田助教授には情報ネットワークやLearning Resource Center (LRC) の機能を中心として、福留課長と岩本掛長にはオンライン目録の利用状況を中心とした運営方式や生命科学図書館新設計画の中心に位置づけているLRCの運営方式を中心として、さらに高課長補佐と清水課長には建築、内装、設備などを中心としてそれぞれ専門的な立場から調査をお願いした。また、テキサス大学に滞在中の玉川裕夫歯学部講師は、通産省の2種情報処理技術者資格の免許を取得されているので現地で特別に参加して頂いた。なお、テキサス大学では医学部内分泌学教室に滞在中の米田俊之歯学部講師にも図書館長との事前連絡等でお世話になった。

第1次視察団が東部の医学図書館を視察したので、今回は中西部を中心として調査するこ

となり ①ワシントン大学（シアトル） ②UCLA ③テキサス大学（サン・アントニオ） ④ミシガン大学 ⑤シンシナティ大学の5ヶ所を訪問した。このうちシンシナティ大学医学図書館はIAIMS（Integrated Academic Information Management Systems）実験機関であるほか、いずれもデータベース・ネットワークやLRCなどの面でとくに進んだ医学図書館である。なお、訪問した大学にはキャンパス内に20～30にも及ぶ各種専門図書館が散在していたので医学図書館を視察した残りの時間を利用して幾つかの図書館や大学附属美術館を訪ねることができた。その中ではワシントン大学のSuzzallo Library、ミシガン大学のLaw LibraryとMuseum of Art、シンシナティ大学のLangsam Libraryなどの素晴らしい図書館を訪ねることができた。どの図書館でも歓迎を受けたが、なかでもUCLAではFaculty Clubで昼食をごちそうになったり、シンシナティでは大学名入りの立派なセーターをプレゼントされ、その上、夜にはピート・ローズの率いるシンシナティ・レッズとビッグバーグ・パイレーツとの試合に招待された。当夜のゲームではレッズは大敗を喫したが、お蔭で一同、最後の夜をリバーフロント・スタジアムのグリーンボックス席でエンジョイすることができた。

さて各図書館については、それぞれ専門的な立場から報告されるので私は全般的な印象を述べるのに留めたい。今回訪問した大学のうち、比較的古い大学、たとえばワシントン大学やミシガン大学などのキャンパスは建物自体やそれらの配置・庭園との調和などの点で全くヨーロッパの大学のコピーと言っても過言ではない。米国人のヨーロッパへの郷愁を感じさせる。図書館についてもワシントン大学のSuzzallo Libraryやミシガン大学のLaw Library

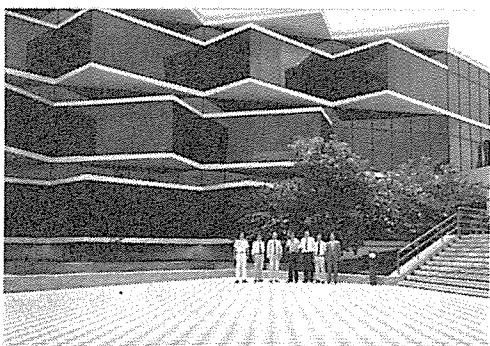
旧館などの文科系図書館はヨーロッパの古い教会の伽藍を思わせるような閲覧室を誇っている。しかし、このような大学でも自然科学系の図書館は近代的な建物であることが多い。とくにテキサス大学（サン・アントニオ）のような広大なキャンパスを持つ医学センターでは、正面が波形のブラックコーティングした総ガラス張りで極めて斬新なデザインを誇る超近代的な図書館であった（写真）。1983年にオープンしたこのBrisoe Libraryは外観に劣らぬ情報システムを完備し、自

主開発した毒生物学ファイルのCD-ROMを備え、LRCの設備も素晴らしい、1984年には早くもJohn Cotton Dana Public Library Relations Awardを受賞している。したがって米国内からも見学者が多いとのことであった。

サン・アントニオのようなキャンパスが広い大学では図書館の周囲に平面的な駐車場を設けているが、市街地の中にある大学では高層あるいは地下に駐車場をつくるなど立地条件に応じた対策がとられていた。したがって生命科学図書館をめぐって各方面から要望の高い駐車場問題をどのように解決すればよいか？ 是非とも施設部の方々に名案をお考え頂きたい。

さて、64年度の概算要求においては学生の基礎・臨床教育および研究者サポート・サービスを充実させるべくLRCを初めて盛りこんでいる。米国の進んだLRCについては別に詳しく報告される予定であるが、今まで日本では見られなかった施設が生命科学図書館に実現できるよう文部省の御理解を頂きたい。

米国と日本の医学図書館の大きな相違点の一つはスタッフの数と事務室の広さであろう。中之島分館で言えば、課長・掛長は勿論、主任クラスの職員まで、米国ではどの図書館でも



例外なく明るくて広々としたガラス張りの個室で悠々と執務している点であり中之島分館の現状と較べてその差は余りにも大きいと言わざるを得ない。この点はヨーロッパの図書館でも全く同じであり、欧米では当然のことであって何も驚ろくには当たらないのである。米国の医学図書館の現状は、OPAC（オンライン利用者検索目録）及びMEDLINE等のオンライン・データベース又はCD-ROMの利用者検索が一般化し、キャンパスネットワークが整えられて各種のファイルにアクセスしうること、さらに必要とする文献のコピーを電子メールで取り寄せられるなど、私自身が留学していた頃と比較すると長足の進歩を遂げている。その上、格調の高い建物、隅々まで行き届いた内装、貴重図書や古書を収蔵するための防災設備、天井の高さ、書架や机の間隔、立派な机や椅子など、すべての点で“ゆとり”と文化の豊かさを感じさせた。何故、これ程までに日本の医学図書館が立ち遅れることになったのか？

この遅れを取り戻すことが焦眉の急である。

戦後日本の経済的繁栄は疑いのない事実であろうが、一体、それがどのような文化的・社会的蓄積を日本に齎したのだろうか？^{もたら} 国民一人当たりの所得が世界一になったとしても一般国民の生活環境、とくに住宅、教育環境は未だ世界一には程遠い状況である。経済大国であるのかもしれないが文化的には小国であると言わざるを得ない。図書館に限って考えてみても単に蔵書数や雑誌のタイトル数を誇るだけではなく、近代的な情報システムやLRCなどの設備は勿論のこと、建物の外観や内装が立派で学生が閲覧室に入ったら勉強しなければいけないという気持を自然に抱かせるような雰囲気を醸成する付加価値を与えることが今後は大切である。私共は学生が卒業してからも誇りに思えるような豊かな内容を持った「生命科学図書館」、すなわち、光ディスクなどの電子的媒体に資料を蓄積させ、オンライン目録や各種データベースを整えるとともにODINS（大阪大学総合情報通信システム）計画とドッキングさせてキャンパス・ネットワークを張りめぐらせ、パソコンで各種ファイルにアクセスしうるような図書館、さらにはこれにLRCを設置して学生教育および研究をサポートして医学・生物学系外国雑誌センター館の機能を効率よく発揮させる……そのような図書館を65年夏までに新営しなければならない使命を帯びている。関係各位の御支援をお願いする次第である。

最後に日本、とくに阪大においては図書館職員数が少なすぎること、また文部省の図書館のための基準面積が、学生数・教官数・蔵書数・製本した雑誌数などにより算出されることになっており、製本していない近着雑誌の面積は計算外になっている点など、文部省・大蔵省当局に是非、見直しを要望したい。それと並行してハード・ソフトの両面で民間活力を導入することも考慮する必要があろう。外国のホテルや名画を買い占めることも悪いことではないかもしれないが、文化的・社会的ストックを齎すことにも目を向けて頂けないかというのが私共の願いである。

以上、視察の概要を記したが、今回はとくに文部省の高課長補佐と本学施設部の清水課長に御参加頂き、米国と日本の図書館の格差が如何に大きいかを強く認識して頂いたことが最も大きな成果であったと言える。

最後に団員を派遣して頂いた文部省文教施設部、本学施設部、御理解を頂いた総長、事務局長に謝意を表する次第である。また、手続き等で御世話になった事務局、図書館職員の方々等に感謝の意を表したい。各図書館で頂いた多数の資料に加えて写真やビデオテープ等が生命科学図書館新営計画の参考になれば幸いである。

（すずき ふじお 中之島分館長 歯学部教授）

日米大学図書館会議に参加して

浅野次郎

機内食でミルクを注文したらビールをってきた。まず訪米初日のこの小さな失敗が、今回の北米各地訪問の象徴的出来事であった。

矢守図書館長と私は、去る昭和63年9月24日から10月9日まで16日間、ウィスコンシン州ラシーンで開かれた第4回日米大学図書館会議に日本側代表団員として出席するかたわら、米加両国の主な大学図書館、いくつかのビブリオグラフィック・ユーティリティ（BU：オンラインで書誌情報データベースサービスを行っている組織）を視察した。

会議は、10月3日夕刻の開会式から6日午後の閉会式まで、連日ホテルを8時半に出て夜9時半帰着まで日程がぎっしり詰っていた。参加者数は日本側36名、米側33名、会議は全体会議と8つのWGとから成り、午前中の全体会議では午後の各WGのテーマに関連した日米双方のスピーカーの講演があり、WGの討議内容・勧告案は翌日朝各WGのCo-chairが報告するという形が採られた。各Co-chairには、若手の課長クラスで将来の日本の大学図書館の中核となると思われるRapporteurと称する縁の下の力持ちのほか、事務(部)長クラスの補佐役が付いた。因みに、矢守館長は、WG3「米国における日本コレクション」のCo-chair、私はWG1「CJK（中・日・韓）プロジェクト」の補佐役を分担した。

会議の詳細は、来春刊行予定の「大学図書館研究No.33」に収載される予定であるので省くが、第1～3回日米会議は、まだわが国大学図書館界は「戦後」を脱しきれず、参加者数が多くなったりして、先方から教わったり、セレモニー化したきらいがなくもなかったが、今回は比較的少人数で、テーマも具体的に絞られ、一方、学術情報システムの定着など日本側の環境の向上も影響したためか、双方共通の土俵で討議ができ、特に日本側の発言が多く所期の成果が得られたと考えられる。

北米の各大規模大学図書館では、いずれも1万冊以上の日本語コレクションのほか多量の東アジア各国語で書かれた図書を所蔵しているが、これらの整理・利用は同一部門で多くの場合同一人が担当しているケースが多かった。このような情況からくる必要に迫られたためか今回訪問した有名なBUであるRLG（Research Libraries Group）では40万件を超す東アジア資料DBを同一端末で処理できる「CJK端末」（Chinese, Japanese, Korean）を開発提供している。このCJK端末は、漢字を分解して入力する「文字合成方式」を採用していて、使用文字コードに3バイトコードを使用している。2バイトコードを使用している日本に3バイトコードで国際標準化しようという提案を米側がWG1において出してくるのではという観測が日本側の代表団に拡がり、WG1の黒子役で気の小さい私など米・牛肉・オレンジまで連想し国益にかかる大事件であると会議の前日まで夜も眠れない有様であった。幸い学術情報センター関係者の名スピーチもあってか、最終コミュニケ第一次案には、「東アジア各国における言語処理に最も適した形に開発されたシステムを尊重することを基本原則………」とする文言が入ってホットした。

矢守館長が主宰した「日本コレクションWG」では、各大学日本コレクションが、円高に

よる予算不足のため、新規補充ができない。また和書の目録作成ができる目録係がほしいなど日本側の協力が要請された。30年前と主客転倒である。WG 2「資料の保存」に関連して米側スピーカーP.Battin女史（昨年来日）から、米国における調査研究図書館の蔵書の中25%（約7,800万冊）が劣化の状態にあること、20年計画でマイクロフォーム（MF）化を中心とした保存をすることが話された。カナダも含め訪問した北米各大学図書館ではMFは、保存手段・検索手段として、紙や磁気媒体に伍して市民権を持っているのは印象的であった。

第5回日米会議は、4年後日本で開くことが合意され、今回同様少人数で、実質的討議ができるよう具体的テーマに絞ることが望ましいとされた。

紙幅の都合で訪問した個々の図書館の紹介を避け全般的な記述に止めるが、先方は会議出席者も含め、館長・副館長（部課長相当）に女性が多い。男性と同じく大学で専門分野を修め大学院で図書館情報学の学位をとり、広い国土をあちこち転勤し、ハツラツとしている。建物・設備をハードと考え対置すると……各種サービスなども含めソフト面では15年～20年間わが国は遅れているというのが代表団の感想でもある。Library Hourにしても季節・曜日・コレクションによりそれぞれサービス時間帯が異り、プロフェッショナルのほかに多くのノンプロ、パートタイマーが組込まれ行届いたサービスをしている。

コンピュータシステムも多様化している。受入・閲覧などいわゆるハウスキーピングと目録を中心とした検索は別のシステムを使っている場合が目につく。たとえばUCLAでは前者は「ORION」というカリフォルニア大の9キャンパス・ネットワークシステムを使い、目録はOCLC（Online Computer Library Center）を使って作成している。前者では手続中（IPF：In-Process File）のファイルを利用者が見ることができるほか、シカゴ大のシステムではその図書は何時頃整理が終るかという見込情報も判るようになっていた。もちろんキャンパス内外からのいわゆる在宅（室）端末による検索は、いずれの大学のシステムも可能である。

面白かったのは、時あたかも“知的所有権”で日本に対する風当たりが強い折、コイン複写機はないだろうと思っていたが、どの大学も堂々と利用案内にコイン複写→10セントと明示している上、玄関附近に両替機やdebitカード（一種のプリペイドカード）の自動販売機があり、これを使えば7.5セントに割引している。

私達は本館だけを見たが、巻頭言に鈴木教授が書いておられるように、建物のスペースに余裕があり、什器は豪華で木をふんだんに使っている。サービスのよさは別にしても満席になるのは当たり前だとも思った。今回の旅行に際してお世話になった大学当局、留守中迷惑をかけた館員諸兄姉に深謝したい。

（あさの じろう 事務部長）

利用者用オンライン目録検索（OPAC）の開始

9月19日（月）より、図書館所蔵の図書雑誌の所在検索が、本館の貸出カウンターのそばにある端末機で、可能となりました。

サービス対象は雑誌と図書です。和洋ともにサービスしています。図書館本館で昭和62年2月以降整理している開架図書（即ち、1階2階の開架図書室にある図書）はすべて検索の対象となっています。雑誌については全学の所蔵雑誌について検索できます。また、最新の

到着状況についても即座に知ることができます。

前号でご紹介した大型計算機センターでの学術雑誌データベースの検索サービスは、大型計算機センターの利用資格を有しないと利用できませんでした。今回開始した検索サービスは、図書館利用者ならどなたでも利用できるものです。教官はもとより、学生のかたでも、図書館に設置した端末機で検索できます。

検索方法は二種類用意しました。一つは開始当初から利用していただいているラインモードでの検索です。これは一行ずつ入力し表示するもので、一般的な商業データベース検索システムと同じです。しかし、操作に不慣れな方には多少使いにくい点がありますので、画面モードでの検索を用意し、12月より利用できるようにしました。この画面モードでの検索は画面ごとにやりとりしますので、電算機との対話がスムースにできます。

今までカード目録を見て「なに」が「どこ」にあるかを調べていましたが、これからは電算機を使ってオンライン目録を調べるようになります。

カード目録と比較したとき、様々な点で検索効率がアップしています。

たとえば、カード目録では書名の最初から知っていないと検索できませんが、このオンライン目録では書名の中の単語で検索し、ブール代数の集合演算を行って対象をしづらこむことができるので、書名のとりかたのルールを知らないても図書などをさがすことができます。

また、この検索システムでは、学術情報センターに目録所在情報を登録して目録をとるのとほぼ同時に検索用データベースにデータが作成されます。したがって、図書が書架に配架されるときにはすでに検索ができるほどに早く情報が提供できます。

また、もし探し出した図書が貸出中であれば、ディスプレイにそのことを表示しますので、書架までいって探しまわることがなくなります。

このようにオンライン目録では様々な検索方法が提供でき、また沢山の情報を迅速に提供できるので、パソコンなれした学生たちや、電算機はじめてという教官先生方にも人気を呼んでいます。

次頁に画面の例を載せます。マニュアルは図書館の端末機のそばに置いてありますので、よく読んでご利用ください。

この利用者用オンライン目録検索（OPAC）は図書館員が作成したものです。図書館員がプログラム言語を勉強し、電算機システムについて学習し、夜遅くまでかかってテストをくりかえし作成したものです。いろいろ不備な点があろうかと思いますが、その都度修正し、図書館にとって最もふさわしい検索をつくっていきたいと考えております。そのために、利用された感想やご意見を忌たんなくお寄せください。

研究室等の端末からの検索サービスの開始

大型計算機センターでの検索システムと同様に研究室等の端末からも、電話回線（公衆・構内）を通して図書館のデータベース（図書・雑誌）に直接接続し検索できるシステムを、新年1月より公開します。お手持ちのパソコン等に音響カプラー・モジュムなどが取り付けられている場合には、所定の手続きをすることで即座に利用できることとなります。利用申請書等、利用に関する詳細は本館学術情報掛（豊中地区2330）にお問い合わせください。

検索画面

R IDLE	KBD	021	R4.03
* * *	図書 DB 検索	* * *	
* * 図書検索を始めます * * NOV. 1988 ED.			
書誌レコード数： 29230			
コマンド： F T EQ ケイタイ # ヒット件数： 527 集合番号： 1 コマンド： F T EQ リロ # ヒット件数： 279 集合番号： 2 コマンド： AND 1,2 # ヒット件数： 30 集合番号： 3			
コマンド入力 <input type="text"/>			
R* <英数>			

簡略表示の画面

R IDLE	KBD	021	R4.03
* * *	図書 DB 検索	* * *	
番号 書名 1 國際貨幣経済理論 / P.アーヴィット著；渡辺良夫、 秋葉弘哉共訳 a OR:INTERNATIONAL MONEY AND THE REAL WORLD. 2 日本経済と金融政策：時系列モデルによる理論と実証 / 幸村千佳良著 -- 1986 3 國際マクロ経済学：基礎理論と応用 / W.M.コーテン著； 岡部光明訳 a OR:INFLATION, EXCHANGE RATES AND THE WORLD E 4 海洋法の歴史と展望：小田斑先生還暦記念 / 山本草 二、杉原高徳編 -- 1986 5 経済動力学の理論 / 宇沢弘文著 -- 1986 6 近代経済学：経済分析の基礎理論 / 新聞陽一ほか 7 経済動力学の理論 -- 1981 (サミュエルズ経済学体系 / 藤原 三代平, 佐藤隆三編集 ; 4) 8 現代流通経済の基礎理論 / 加藤義忠著 -- 1986 # 表示維続 = 送信 表示終了 = 0 所蔵表示 = 番号			
コマンド入力 <input type="text"/>			
R* <英数>			

所蔵表示の画面

R IDLE	KBD	021	R4.03
* * *	図書 DB 検索	* * *	
国際マクロ経済学：基礎理論と応用 / W.M.コーテン著； 岡部光明訳 a OR:INFLATION, EXCHANGE RATES AND THE WORLD ECONOM Y. 3RD ED. -- 1986 本館 開架 333.6COR 8603051031 本館 開架 333.6COR 8603051049 本館 開架 333.6COR 8603051056 本館 開架 333.6COR 8603051064 本館 開架 333.6COR 8603051072 本館 書庫 333.6COR 8617026128 本館 書庫 333.6COR 8617030518 本館 開架 333.6COR 8703052533 総合 333.6COR 8717041498			
コマンド入力 <input type="text"/>			
R* <英数>			

元事務部長中野六郎氏受賞

本学附属図書館の元事務部長 中野六郎氏には、11月3日の秋の叙勲において勲五等瑞宝章を受賞されました。関係者にとっても大変喜ばしいことであり、心より御祝い申し上げます。

目録システム講習会（地域講習会）の実施 について（報告）

学術情報センターとの共催で本館において目録システム講習会（地域講習会）が開かれた。学術情報センターでは、昭和60年度から目録所在情報サービスをさらに推進し、大学図書館の現場で働く目録業務担当者の教育訓練の機会の拡大を図るため、従来センターのみで実施していた講習会を地域においても開催することになったもので、大阪大学では今年で2回目である。第1回目の昨年は受講者は学内職員のみで、期間も5日間だけであったが、今年は他大学の受講生も参加して、実質的な地域講習会となった。

期間は前期が8月22日から8月26日まで、後期が8月30日から9月2日までの2週間にわたった。受講生は、前期が大阪教育大学、和歌山大学、兵庫教育大学より各1名、学内より3名の計6名、後期は大阪外国语大学、神戸商船大学、和歌山大学より各1名、学内2名で計5名。

8月22日の初日は、それぞれ地域講習会が開かれる京都大学、神戸大学、大阪大学の受講生41名が大阪大学基礎工学部国際棟で、学術情報センターよりの講師2名を迎えて、カリキュラムの第一講と第二講の講義を受けた。2日目以降の講習はセンターのデータベース研修終了者、タスクフォース（特別研修）経験者等5名が講師となって行った。講習内容はセンターのカリキュラムに沿って行われ、講義は附属図書館3階会議室、実習は1階事務室の目録掛の端末6台全部を使って行われた。

実習には各自1台ずつ端末を使用し、マンツーマンに近い形の指導が行えた。コンピューターの普及により受講生は端末操作に慣れており、センターの目録システムにすぐに溶け込めた人が多かった。わずか5日の日数だったが、システムの基本的理解と目録を入力できる段階まで進めた。ただ質のよいデータベースを構築していくには、この講習会以外に目録システム経験者等を対象とした上級者用コースが必要であると思われる。

教官著作寄贈図書

—昭和63年11月までに受入した資料—

一本館—

浜口 恵俊 (人科・教授)
 「日本らしさ」の再発見
 (講談社・昭63)

人間科学部図書室—

浜口 恵俊 (人科・教授)
 「日本らしさ」の再発見
 (講談社・昭63)

ー中之島分館ー

中川 八郎 (脳・教授)
 脳の栄養—脳の活性化法を探る
 (ブレイン・サイエンスシリーズ1)
 (共立出版・昭63)
 医学部附属癌研究施設・癌発生学教室
 阪大癌研腫瘍発生学教室・研究業績集
 1976~1987
 志水 彰 (医・助教授)
 新精神医学入門
 (金芳堂・昭62)

ー吹田分館ー

赤木 新介 (工・教授)
 A I 技術によるシステム設計論
 赤木 新介
 (コロナ社・昭63)
 東 孝光 (工・教授)
 「塔の家」白書 六坪に住んだ20年
 [住まい学体系] 東 孝光 他著
 (住まいの図書館出版局・昭63)
 末石 富太郎 (工・教授)
 Proceedings of the second international workshop on risk assessment and management
 大阪大学工学部環境工学科編 (1988)
 坂田 祥光 (産研・助教授)
 大学院 有機化学 (上、中、下)

岩村 秀 他編

(講談社・昭63)
 熊谷 信昭 (阪大・総長)
 電磁理論特論 [エレクトロニクス
 モノグラフシリーズ] 熊谷 信昭 他著
 (コロナ社・昭63)
 飯田 孝道 (工・助教授)
 The physical properties of liquid metals
 飯田 孝道著
 (Oxford University Press 1988)
 荒田 吉明 (溶接研・名誉教授)
 高温工学 荒田 吉明 著
 (日刊工業新聞社・昭63)
 尾崎 弘 (工・名誉教授)
 画像処理 ーその基礎から応用までー
 第2版 尾崎 弘、谷口 延治著
 (共立出版・昭63)
 久保 忠雄 (工・名誉教授)
 応用数学の基礎 第6版
 P.I.Romanovskii 著
 (共立出版・昭63)

ー薬学部分館ー

北川 熨 (薬・教授)
 大学院・有機化学、上・中・下
 北川 熨、岩村 秀、野依 良治、
 中井 武 編
 (講談社サイエンティフィク・昭63)
 岩田 平太郎 (薬・教授)
 Taurine and the Heart
 Iwata, Heitaroh, Lombardini, J.B.
 & Segawa, Tomio. ed.
 (Kluwer Academic, c 1989)

ー歯学分室ー

石田 武 (歯・助教授)
 カラーアトラス頭頸部腫瘍
 酒井 俊一、石田 武 他編
 (六法出版社・昭63)

会議

一分館長会議一

63. 11. 1 (火) 13:00~14:55

報告事項：1. 雑誌目録データベースの使用状況について。情報サービス課長から9月19日より本館貸出カウンター前の端末機で始めた図書館所蔵の図書及び雑誌の所在検索の利用状況の報告と今後の予定について説明があった。2. その他、電子計算機のバージョンアップについて。情報管理課長から次期リプレイスに当り事務サイドで検討中である旨報告があった。

協議事項：1. 本館の将来計画について。(1)本館建物の新営増改築について、(2)本館の目録システムの基本的なあり方について、以上二点につき協議した。

日程

63. 8. 10	中之島分館運営委員会	(中之島分館)
63. 9. 21	近畿地区医学図書館協議会例会（第45回）	(シオノギ西宮研修所)
63. 10. 3~6	日米大学図書館会議	(米国ウィスコンシン州ラシーヌ)
63. 10. 20~21	国立七大学図書館協議会	(東北大学)
	国立七大学図書館部課長会議	(東北大学)
63. 11. 1	分館長会議	(本館)
63. 11. 1	図書館体系検討小委員会	(本館)
63. 11. 16	国立大学図書館協議会理事会等	(京都大学)
63. 11. 17~18	第2回国立大学図書館協議会シンポジウム（西会場）	(関西地区セミナーハウス)
63. 12. 2	昭和63年度主題別研究集会津田愛知淑徳大教授：「出版物の新しい傾向と大学図書館」	(基礎工学部国際棟)

人事

異動前の所属・職名	氏名	異動内容	発令年月日
	東尾 寛子	(採用) 医学情報課運用掛事務補佐員	63. 10. 1
	中村あけみ	吹田分館受入掛 "	"
	西森 豊	医学情報課目録掛 "	63. 11. 16
		(辞職)	
医学情報課運用掛事務補佐員	馬嶋 説子		63. 9. 21
吹田分館受入掛 "	矢野 幸子		63. 9. 30
医学情報課目録掛 "	伊藤真理子		63. 11. 16